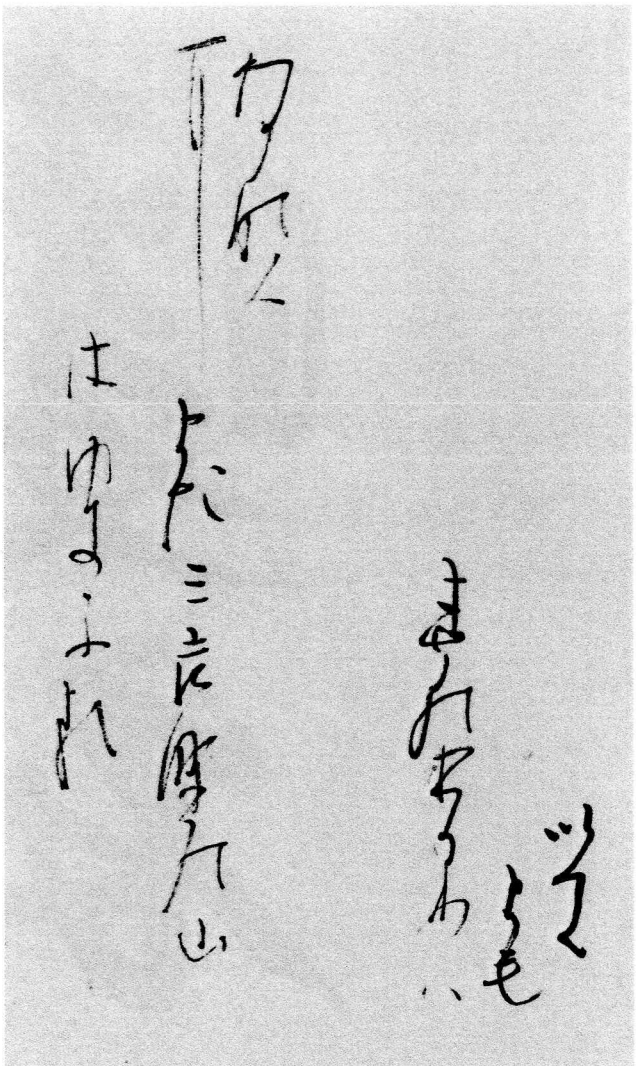


中村素堂先生の仮名散らし書きの魅力(七)
—三十六歌仙—

いづくとも 春の光は わかなくに まだみ吉野の 山は雪ふる

凡河内躬恒 おおしこうちのみつね



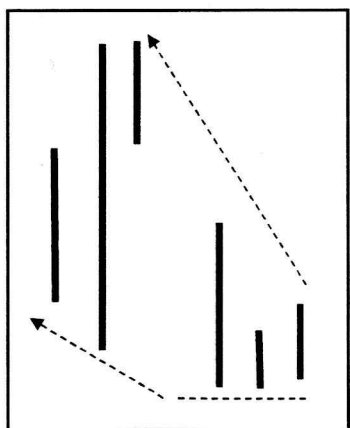
中村素堂先生の書 中谷春径先生提供

〈歌意〉

「どこという分けへだてもなく春の光は満ち満ちておりますのに、吉野の山ばかりはなお春におくれ、寒々と雪が降っております。」この歌は、『躬恒集』の冒頭にあります。

(凡河内躬恒)
生没年未詳(八五九年?~九二五年?)。『古今和歌集』選者の一人として紀貫之(九十九首)に次ぐ六十首を入集された歌人である。『躬恒集』『論春秋歌合』がある。

〈線の構成〉



〈字母〉

わ わか 可 かな 那 な く
 耳 みみ に
 ま た 三 吉 野 能 の 山
 は ゆ 支 支 類
 春 能 悲 可 利 毛
 は 能 悲 可 利 毛
 以 つ く

書式は六行書きにし、中央にやや空間を持たせて、右側に五・七の二句を小さめに、左側に五・七・七の三句を大きめに組み合わせさせて書かれています。墨は一句目、四句目の頭でつけています。(中村青藍)